研究ノート

旧府内城下図の信憑性

橋本操六

近世府内城下町は、慶長七年、時の藩主竹中重利によって町割りがなされ、大友時代の城下町が移転させられたという。後の史料によると、府内城下町は府内町組三〇町、松末町組一一町、千手堂町組六町、笠和町組二町の計四十八町（東新町は府内と松末の入会であるため一町で集計した）となっている。

では、大友時代の城下町といわれるものは、いつ頃、どこに、存在していたのであろうか。関係史料をあげながら、その所在地、発生について私見を述べ、先輩各位の御叱正を願うものである。

一　絵図と現状

『大分県郷土史料集成・地誌篇』に、「旧府内城下図（大友時代）」と題する絵図が収録されている。これによると、城下町は「市川」と呼ばれていた現大分川の左岸に位置し、北は当時の河口部で、現在の長浜町。南は現在の元町まで延びている。城下町の核である「大友館」は、町部の中央部に位置し、東に向って建てられている。北は御北町、西は御西町、東は御内町があり、門前には大分川に向って御所小路町が通っている。なお南には堀があり、堀の東には萬寿寺が建っている。また、要所要所には木戸が構えられている。

この絵図の信憑性については、大友館が現存せず、また遺構の存在も確認されていないため、城下町の存在も疑問視されるところである。しかし、絵図にある他の建造物や遺跡のうち、現存するものに稲荷社、来迎寺、デウス堂跡、大智寺をあげることができる。これらの所在地を現在の町名に当ててみると、大友館の北にある稲荷社は錦町二丁目、その北の来迎寺は錦町一丁目、大友館の西のデウス堂は顕徳町四丁目、大智寺は金池町四丁目となり、絵図の位置関係と現状は完全に合致することが判明する。

また、大友館の南にある堀の東側の万寿寺は、現在の大字大分のうちにあり、その位置には九州乳業株式会社、帆秋精

神病院が建設されている。帆秋病院の建設基礎工事中に瓦類が多数出土していることから、万寿寺の存在は一応確定している。これらの位置関係からすると、大友館は国鉄日豊本線の北側、顕徳町三丁目に存在していたことになる。現在国鉄をまたぐ国道10号線が大友館の北東部分の上を通っている。

二　町名の信憑性

絵図にみえる町名と、天正十六年参宮帳（大分県史料二五巻所収後藤作四郎文書）にみえる町名及び江戸期府内城下町の町名を対比してみると次表の通りとなる。

絵図町名	天正16年参宮帳町名	府内城下町町名	その他府内城下町町名
三宝院町			桧物町（府内）
千手堂町	千手堂		鍛冶屋町（府内）
小物座町		小物座町（千手堂）	京町（府内）
後小路町	後小路	後小路町（千手堂）	革屋町（府内）
（魚ノ店）		魚町（府内）	大工町（府内）
片側町			茶屋町（府内）
今道町			白銀町（府内）
寺小路町			寺町（府内）
ノコギリ町			竹町（府内）
上町			塗師町（府内）
林小路町			田町（府内）
中町		中町（松末）	

絵図町名	天正16年参宮帳町名	府内城下町町名	その他府内城下町町名
下町			室町（府内）
穴井町			上紺屋町、下紺屋町（府内）
長池町		長池町（松末）	東新町（松末と入会）
塩九升町		塩九升町（松末）	胡町（松末）
御北町		於北町（府内）	万尾町（松末）
西小路町		西小路町（府内）	北町（松末）
中ノ町			東町（松末）
御西町		西町（府内）	中横町（松末）
古川町	古川	古川町（千手堂）	
御内町			天神町（千手堂）
桜町	桜町	桜町（府内）	米屋町（千手堂）
唐人町	唐人町	唐人町（府内）	元町（千手堂）
稲荷町	稲荷町	稲荷町（松末）	笠和町（笠和）
横小路町			細工町（笠和）
小笠原町			勢屯町
南小路町			六軒町
今在家町	今在家	今在家町（府内）	御屋敷
堀ノ口町			東広小路（三の丸）

絵図町名	天正16年参宮帳町名	府内城下町町名	その他府内城下町町名
御所小路町			中広小路（三の丸）
名ケ小路町		名号小路町（府内）	袋　町（三の丸）
長田寺町			東立町（三の丸）
辻込町			西広小路（三の丸）
清忠寺町		清忠寺町（府内）	中立町（三の丸）
上市町		東上市町、中上市町	北ノ広小路（三の丸）
工座町		西上市町（府内）	北裏町（三の丸）
下市町	下　市	下市町（松末）	西新町
ニシテ町			
横　町			
今小路町			
坊ケ小路町			坊ケ小路町
	立　市		
	市之町		
	柳小路		上柳町、中柳町、下柳町（府内）

これらのうち、絵図、参宮帳、府内城下町に共通する町名は、後小路町、古川町、桜町、唐人町、稲荷町、今在家町、下立町の七町にしかすぎない。しかし絵図と府内城下町とで共通するものに、小物座町、中町、長池町、塩九升町、於北

町、西小路町、西町、名ケ小路町、清忠寺町、上市町、坊ケ小路町の十一町を加えることができる。

絵図にみえる四一町のうち、一八町（魚町は除き、東上市、中上市、西上市は一町に数える。）の町名が、府内城下町内にみえることは、府内城下町は大友城下町を移転させたという伝承を示唆するものであり、換言すれば大友城下町の存在を裏付けることとなるのではなかろうか。なお、現在の坊ケ小路が絵図に示されている地点に残っているのは、寺町に移転した本光寺（大友館の北＝稲荷社の南に並ぶ＝錦町2丁目）を除き、来迎寺等が移転することなく残存したためであることが推察される。

三　大友城下町の成立時期

大友義統は、天正三年ごろから天正七年ごろまで使用した花押を据えた次の判物を、税所越中守に発給した。

府内屋敷、祇園御神領分之儀、其方可有格護候、然者東之築地□（等カ）外通者、町人召移、以屋敷料、右社頭上葺等可有馳走之由、尤肝要候、仍諸点役之儀、令免許候趣、巨細口上申候、恐々謹言、

六月十二日　　義　統（花押4）

税所越中守殿

この史料は、古国府の日野家に伝ったもので（原本所在不明、大分県史料九巻所収）、まず、府内屋敷、祇園社神領等の維持管理の責任者は税所越中守であったことが判明する。祇園社は、現在の大分上野丘高等学校グランドの西にある弥栄神社のことで、以前は上野台地の南にあった岩屋寺の境内に鎮座していた。元和3、4年ごろ現在地に遷されたという（雉城雑誌）。

次に、東の築地とは、どの建物に附属する築地を指すかが問題となる。史料は祇園社の屋根の葺替に要する費用の捻出に関するものであり、しかも、昔の岩屋寺境内に存在する小社であったことが推察され、築地を構える程の大社ではなかったと考えられる。また、岩屋寺は、鎌倉時代末期には上野台地に移され、総社山円寿寺（現上野西に所在）と改称しているので、かっての岩屋寺境内は極めて淋しい。しかも荒廃に近い環境となっていたと思われる。従って、その東側、即ち現在の広瀬橋の近くに町人を召移す条件は全くないといっても過言ではなかろう。

とすると、史料中に残る建物は府内屋敷だけで、築地も府内屋敷に附属する築地ということになる。では、この府内屋敷とは、絵図にみえる「大友館」のことを指すのであろうか。大友氏の居館を適確に示す史料は皆無であるが、大友興廃記、豊後国志等の編纂物によると、上野台地上にあったとしている。現在でも上野丘西3、4、5、6、7、8、9組は「御屋敷」と呼ばれる地域であり、また大友氏の居城「西山城跡」として顕彰されている。築地を、この地にあった居館の築地とすると、町人が召移された地区は、上野丘西14、15組一帯ということになる。しかし、この地は江戸時代は六坊村と呼ばれているように、総社山円寿寺（旧岩屋寺）の六つの坊が存在していた地区で、ここに町人を召移したとも考えられない。

以上のことから、府内屋敷とは絵図にみえる「大友館」のことを指すものと考えてもよいのではなかろうか。この推論が当っているとすれば、大友城下町の成立は天正三年ごろから七年ごろ以降ということになる。

四　元町の解釈

府内城下町の元町は、千手堂町組に属すが府内城外堀の外側にあり、しかも外堀から元町北端部までの最少距離でも1キロメートルを超える。しかも、外堀の外側に新設された東新町、西新町を除くと、唯一つ城下町組に編成されている町である。

なぜ元町が町組に入れられているのであろうか。現在の元町は、絵図にみえる三宝院町、千手堂町、小物座町、後小路町が並ぶ地区で、片側町に面している。また、この四町と上野台地下の間には、極楽寺、比丘尼寺、真花寺、瑞光院が並んでいる。この四つの町も、他の町々と同様、府内城下に吸収され、千手堂は小物座町、天神町、後小路町、古川町、米屋町、元町の六町を単位とする千手堂町組の総称名として使用されている。これら四町の移転後の地区名が元町となったのである。

大友城下から府内城下に移った町は多いのにもかかわらず、その跡には何の町名も付けられていない。元町だけがどうして町名を付けられ、町組の中に組み込まれたのであろうか。その一つの理由として考えられるのが、元町地区の歴史的経過である。

元町地区は、かっては勝津留と呼ばれていた荒野で、寛徳二年（一〇四五）＝永承元年（一〇四六）の頃、荏隈郷司膳伴光恒（権介膳伴元恒）が国裁を申請し開発が開始された。以後、数人の手を経て、宇佐宮神領常見名に組み込まれた。鎌倉期の勝津留地頭職は、由原宮（柞原宮）の山僧備後法眼幸秀が帯していたが、大友初代能直の末子志賀能郷を幸秀の養子にすることを条件に、能直に譲られている。貞応二年（一二二三）の大友能直譲状によると、勝津留は高国府と号すとみえる。

建長六年（一二五四）の幸秀、頼秀連署契約状には高国府勝津留とみえるが、康元元年（一二五六）、弘長三年（一二六三）の尼深妙の史料には、勝津留の名は消え、高国府だけとなっている（志賀文書＝大友史料）。この間、勝津留は大友惣領家頼泰によって押領され、南北朝期には高国府村、降国府村として惣領家の管轄下に入っている。（大分県史料二六巻所収大友文書）。

ここで、高国府＝隆国府という地名の使用時期と所在地を確認しておくことにしたい。宇佐宮神領大鏡の勝津留の項に引用されている、天喜元年（一〇五三）八月の多米倉満庁座所裁申文に、「限西高国府岸上額畠際」とみえるのが初見で、他の場合は「高坂横道」とみえる。この四至によると東と北は大分川、南は石屋崎際（石屋寺前）とあることから、高国府は上野台地を指すことがわかる。そして高国府の意味は、国府（古国府）に対する高い所にある国府ということで、国府の行政機関か、それに附属する施設が何らかの形で存在していたことが推論されている。

従って開発された勝津留は、大友頼泰が勝津留に係る一職を本主備後幸秀に要求し、志賀能郷に譲られた地頭職や弁済使職を押領した時点から、勝津留の独立性は薄れて来たといえる。これは、高国府に守護所を構えた大友頼泰が、軍事上勝津留を支配する必要に迫まられたからであろうとされている。

高国府のある上野台地は河岸段丘的要素を持ち、台地北部を除く他の場所は、敵の攻略を防ぐには格好の条件を備えているが、勝津留を通って北側に廻わると、緩やかな傾斜地になっている。この条件から、守護所の防備上勝津留を惣領家が支配する必要があったものと考えられる。守護所防備に重要な意義をもつ勝津留は、当然高国府の附属地となり、次第

に勝津留の名が消え、高国府の附属地高国府村になったものと考えられる。

また、この地区は元町石仏が存在することや、絵図にみえる極楽寺、比丘尼寺、真花寺、端光院があるように、仏地としても重要な地区であったことが判明する。大友氏時安堵状に「豊後国隆国府市屋敷一所事、就仏地念定寄進、被建立積善庵由承候畢、・・・」とみえ（大分県史料一〇巻所収荒巻文書）、これと関係する応永二年（一三九五）の田原親貞置文に「豊後国府立市仏地か居屋敷一所・・・」とみえることからも仏地の様子が窺えるし、この地区が応永期には立市とも呼ばれていることも判明する（大分県史料十三巻所収草野文書）。

以上のような歴史的経過をもち、府内城下町に移転したものの、この地区が門前市的な性格を持っていたため元町の名が付せられたのではなかろうか。そして町としての要素も継続していたものと思われる。

五　むすびにかえて

大友城下町は、現在の元町、即ち高国府立市を中心に、門前町的なものとして発生し、天正年間には絵図にみえるように、大友館の東の築地前に町々が形成されていったと考えられる。

大友館の建設時期を考えるため、周辺にある寺院等の建立年代を掲げておくことにする。

①来迎寺＝文亀4（9）年開基

②稲荷大明神＝創祇未詳。社家安藤氏は享禄三年より当社の鑰取なりといへり。

③大智寺＝嘉慶元年創建、明応二年大友義右再興

④大雄院＝永正年中（十年）大友義長建立。

⑤顕徳寺＝デウス堂＝天文中大友宗麟建立。

⑥本光寺＝創建未詳。

以上は雉城雑誌にみえる記事であるが、大友氏との関係が濃厚であることは推測できる。

この中心となったのが、大友館であったろうことは推測できるにしても、裏付ける史料は全くない。大胆な推察が許されるならば、上野台地上にあった大友氏の居館は政治の機関としての館で、絵図にある大友館は私宅としての館であったということができよう。

大友家文書禄は、大友親著の死を、「（応永）三十三年丙午十一月二十九日、親著卒於府内別墅、号大恵寺玉庵道英」と記述するが、この「府内別墅」こそが、絵図にみえる「大友館」を指すものではなかろうか。なお、別墅とは、別荘、下屋敷を指す言葉である。

（[redacted]　県総務課勤務）